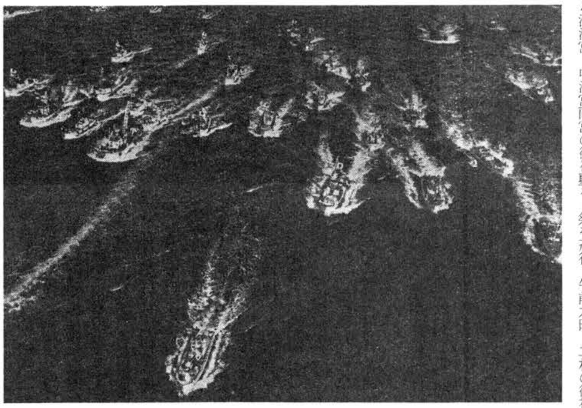
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
定価 一年送料共 1000円

昭和五十二年度秋季大祭の開幕を告げる

海上御神幸祭盛大に斎行



宗像に秋の訪れを告げる当社恒例の秋季大祭ー放生会、その初頭を彩る御生祭（みあれまつり）の海上神幸は、今年も十月一日盛大に執り行われた。

この神事は玄界洋上に鎮座される沖津宮、中津宮両宮の御神璽を一年に一度、陸地の辺津宮に御迎えする神事で、今では秋の風物詩として当地方は勿論のこと、西日本一帯に話題を呼んでいる男壮な海上の祭典である。

午前八時半、中津宮に於て出御祭を斎行。午前九時、二柱の御神轝は白衣白袴、白鉢巻に身を整えたそれぞれ八名宛の若い漁業者の奉仕する輦台により中津宮を御出でましになる。数十名の可愛らしい大島小学校児童の鼓笛隊が元気一杯の演奏で行列の先頭に立つ。大島港内には既に宗像七浦から参集した大小の漁船が波切御幣を船首に戴き、満艦飾の旗の色も鮮やかに御神璽の到着を待っている。本年の御座船は、沖津宮御神璽＝鐘崎の共進丸（宗岡次夫）、中津宮御神璽＝大島の大栄丸（田志力男）の両船で共に二十トン近い大型船で、装備、速力、群を抜く最近新造の優秀船である。赤地に白で染め抜いた二旒の御座船旗、白地に墨書で大書した国家鎮護宗像大社の大幟、古式に則り青竹に靡かせた紅白の御長手、晴の舞台を迎えて誇らしげに潮風にはためいている。秋の空は青く高く、海上平穏、絶好の神幸日和である。午前九時半、打上げ花火の合図と共に大島港出発。全船、エンジンの始動開始、轟音に港内は大きくどよめく。

二隻の先導船に導かれて御座船は静かに発船、波止場に見送る鈴なりの人々から期せずして大きな拍手が湧き起る。満を持した供奉船、参加船が堰をきったように次々と後に続く。出港後順次船列を整え、やがて御座船を中心とする神幸の大船団は南東に向け玄界の洋上を押し渡って行く。空にはテレビ、新聞の取材機（ヘリコプター）四機が海面すれすれに飛び交い、空海一体の大ペーゼントが展開される。近年益々大型化する漁船団の群行は勇壮きわまりなく、往時、玄洋を制覇した宗像水軍の威容を目のあたりに見る思いである。

船団はやがて鐘崎沖を大きく迂廻して一路神湊へと進路を向ける。神湊の海岸は、この盛儀を拝観する人々で満ちている。午前十時三十分神湊港到着、御座船は出迎の人々の拍手の中に静かに着岸奉祝の花火が連発され、港はお祭り気分一色に塗りつぶされる。

本年の参加船数は四百余隻、愈々二百海里時代に突入し、沿岸漁業者も厳しい試練の時を迎える訳であるが、その重圧を撥ね返すような海の男の心意気を示した勇壮な海上神幸であった。

論説

夫婦愛問答（続）

‖女房にお茶を出す夫‖

「なにはにかへり候節ハ、そなたをそばにねせ参らせ候」と、大坂城の淀君に宛てた太閤秀吉の陣中便りに、やさしく労わりの言葉がたどたどしい仮名文字で綴られていたのを見た記憶がある。朝鮮征伐の軍を督励するため、九州名護屋の本陣に出ばった飛ぶ鳥落す勢威盛んな彼が、留守居の淀君を慰める心情は、文字通りの関白亭主ではなくて一個の庶民の平凡さがあった。

若いサラリーマンの家庭と結んでみる。外から帰った夫は自分で湯を沸かし茶を飲む。傍らで赤坊をあやしている妻にも茶碗を差出す。まことに些々たることながら心持よい家庭風景である。

今どき男女同権の理屈を言うまでもなく、妻にもついでにお茶を出してやる心がけに文句なしに賛成したい。近代主義は、さほど手数のかからない家事を夫が自身で処理するよう求めている。当然であろう。それを亭主の肩拳にかかわる、女房のご機嫌とりになる、中にはそんな事をすれば馬鹿にされるなどと考える男性があったら、近代主義に合わない封建頭、チョン髷でも載せて歩くがよい。安物ほど家族の弱い立場の前だけで威張る。職場で対外的仕事で、うだつの上がらぬ者に限って、空威張を得意とする。

女房や子供にだけ、用事をしきりに言いつける、時には大声を出したりする。若しこんな男性に出会ったら「君、笑わせ給う勿れ」と冷やかしてみたくなる。男性仲間では意気地がない。それかと言って強気で、品行方正勤務厳正と、賞めてやるシロモノでもない。悲しいのはこんな愚者と知らずに結婚した女性である。こんな意気地なしの子として生れ、父と呼ばねばならぬ子供達である。

黙って自分で沸かした茶をすする。妻にも入れてやる。改めて時代の感じ方を云々することもない。平凡な所作の中に、対女性観が違って生きている。雅味さえ宿っている。

そうした一杯の渋茶に、ご機嫌取りも駈け引きもない一時の和やかさがあれば、夫婦は円満であろう。家庭は風波の起らぬホホエミに包まれる。

結婚前後の妻となり夫となる両者を戒めた西洋俚諺がある「結ばれる前に、両眼を十分開いてよく相手を見よ。結ばれた後は、必ず半眼をつぶれ」と。実に味深き名言である。

妻にお茶を進める。それは近代主義の合理性をよく理解し、半眼を閉じて和の精神を尊重した夫の理想的な姿である。妻に甘過ぎる理想像なら、甘過ぎてよい。甘過ぎて壊れた家庭は聞かない。

「三千世界の烏を殺しぬしと朝寝がしてみたい」と、自作の傑作を愛人うの女（芸者）に聞かせて甘えたのは、幕末の動乱期に国事に奔走した長州藩士高杉晋作である。晋作は西行法師を景仰して自身は東行と名乗り、惜しくも二十七才の若さで死んだが、その前数年は幾多の危険と困難に突進し、幕府の長州征伐に対し農民漁民を結集して奇兵隊を組織し大活躍を演じている。結婚する暇はなかった。時折寸暇を下関の愛人と過して甘えている。

因みに、下関の郊外吉田郷に東行庵と呼ぶ彼の菩提所がある。筆者は学生の頃参拝して、剃髪して尼姿で奉仕する愛人うの女の話を聞いたことがある。朝のひと時、二人で茶をすすりながら語り合った想い出を、今も懐しく抱いて茶を入れるのですと、尼さん甘えてみせたのは数十年前の話。

三千世界の烏まで殺して朝寝を楽しみ、女房に茶を進めて幸福感を味わう悠長さは、現代のサラリーマンには望むべくもない。混雑する街頭、激しい交通事情、神経もいらだってくるが、一日の仕事を終っての夜のひと時は、どちらが茶を入れても進めてもよい、落ち着いた家庭でありたいものである。それも活力の源泉となる。

ところが緩急の月計差はあっても物価高騰は止まる処を知らず、夫婦共稼ぎが増えてゆく。同時に家庭のトラブルも。鍵ッ児の不良化、夫婦別々の外食増加、家庭は安住の地でなくなって、家出さらに離婚と、新聞ニュースは暗さのない日がない。

経済事情に喰われる理智、物質に追われる人間性を考えてみたい。そして甘えのある家庭に幸福のあることを、絵にした餅でなくて食ってゆこう。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園二―三二（〒八一二）
電話福岡（〇九二）六五一―九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一―三三四一（代）～四番
三五一―一三三四・六〇六六番

【御案内】

宗像大社社号御改称奉告祭

―旧官幣大社宗像神社
宗像大社と社号御改称される―

全国に六千余の宗像神社の総本宮として、又裏伊勢として古くより全国の崇敬者、及び氏子より宗像大社としての呼称が定着していたが、このたび（八月一日付）神社本庁統理の承認を得て、「宗像大社」と御社号を改めた。

当社は延喜式内名神大社として、又天慶年中正一位勲一等に叙せられ明治三十四年に官幣大社に御昇格しており、古事記・日本書紀等の古典によると、天照大神は宗像三柱大神に対して「歴代の天皇を助け奉り、歴代の天皇からお祭りをうけられよ」との御神勅を下されており、建国当初のきわめて重要な時に、重大な御使命をおびて、国内的には九州の緊要な位置、対外的には大陸との交通の門戸に当る宗像の地に、この様な皇祖の貴いみおしえを奉じて三柱の神々が降られたことに、なみなみならぬ意義が拝察され、はやくから国家皇室の守護神として皇室の深い御崇敬があった。

今度の御社号の改称は、延喜の御代以来の重儀で左記の通り祭儀がとりおこなわれます。

◇

宗像大社社号御改称奉告祭

一、臨時大祭
一、期　日　十月十九日、水曜日、午前十一時

以上

昭和五十二年十月吉日

宗像大社宮司　葦津嘉之

特別崇敬者　各位

阿蒙少言

北九州市の八幡東区の中央公民館長として、公共事業にご尽瘁の安川浄生氏からその近著「筑前大島の歴史と風土」と題する書冊を寄贈された。安川氏は大島ご出身駒沢大学卒後しばらく大島中学に教鞭をとられ、現に同島の名刹安昌院の十七世住職でもある◉胸中の理想が燃える時、人を走らす。社会福祉に専念すべく、若き日の安川氏は旧戸畑市に進出、その情熱を傾けて社会奉仕に精進、宗像郡出身で戸畑地区に居住する人達の組織たる戸畑宗像会の幹事としても、郷土愛にも徹した苦労人でもある◉その郷土愛は郷土史研究にも労作を惜しまなかった。氏の自序に「記録を残すことは生命を残すことで」とあるが、真に同感。その心が多忙な福祉関係の公務の仕事の傍ら、郷土研究の文献渉猟に氏を誘い、着々成果をあげさせたのであろう◉現大島村長中村国美弥氏は、竹馬の友、序文の述懐は往年の村役場火災による資料の焼亡を嘆いた処に、旧友の快著が出版されて喜悦、安川業績を讃えている。中村村長も離島の種々の悪条件の中に、郷土振興のために日夜苦心の経営を怠らない逸材と聞く。この人にしてよくこの友の労作を知る、吾人の感銘を深からしめる所以であろう◉巻末に参考文献として五十に近い書冊をあげているが、いずれも大島は勿論宗像郡の史話や気候風土が持つ特性を語るに有力な資料たることを俟たない。四世紀末葉に始まる海外との交渉に、まず航海の安全、皇室国土の安泰を守る宗像三女神の威徳発揚に筆を起して、郷土の精神的軸心の確固不動を強調している。次いで戦国の雄将宗像氏貞。前九年の役で破れた東北の覇者安倍宗任等の末裔にまで触れ漁業の時代的変遷を究明して鯨組の活動など異色の風習も忘れていない。一読をすすめる。（白雲）

第一九五回

宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

深田　中野　節子
手習ひをして居たる間に夫は寝ねつぎおき呉れし炭火の匂ふ

武丸　立石ろせ乃
眼鏡橋を背景にして夫と二人子の撮りくるるカメラに向かふ

香椎　桜井　ツ子
行き戻るわが坂道に散りたまる百日紅のしぼふかき朱

津屋崎　谷口　礼子
木漏れ日は座席の中にきらめきぬ十号台風余波アカシヤに

田島　吉武　武雄
黒部ダム立体化学の粋集め立山連峰積雪まぶし

武丸　原田　リノ
日の沈むを待つごとくにて中空に欠けたる月は光り出だしぬ

津屋崎　占部　由久
はらから揃ひて我を見舞くれし嬉しかなしき涙せきあへずして

田島　楠　理
秋風の吹いて来たりぬ裏庭のサルビヤに止まりしあげはついて行き

曲　天野トモヱ
緑こき草叢より立ち籔蘭のうす紫は秋の色して

津屋崎　浜津　鴻浪
悔となりし言葉を妻へあびせしは妥協し得ざる我が心かも

池田　永富　臻
雨ぐもる山路を越えて入る宿に都わすれの花鮮しき

原町　八波　五月
裏畑の韮の白花目に顕てど麻疹の孫と部屋に籠れり

福間　広渡一寸毛
深みゆく緑の巾も広がりて光も増して吾は老ひ行く

田熊　力丸　一郎
蜜柑狩り笑い声などさざめきて友の厚意に歌友親しむ

福岡南　林　まつゑ
あの月に人が行きしと聞しかどいよいよ澄めり今宵明月

宮田　片山　一
山の端に今日の没陽を見送りて現身吾の在を喜こぶ

福岡　吉田　信夫
亡き人の御霊か草に燃え立ちて今年の秋も彼岸花咲く

田久　橋本　良輔
秋立ちて夏惜しむらん乙女子の白きスカート目に泌みて見ゆ

吉武　白木うめの
午どきの人けなきグランド横ぎりてやうやくポスト探しあてたり

戸畑　田中ハツセ
昼寝の子毛布抱くに取りされば空をつかみて手を泳がしぬ

宮田　片山　朔子
台風は西にそれしと告ぐる夕出揃いし稲穂に吹き渡る風

鐘崎　村田　四郎
数千の供船ひきいし御座船は辺津の姉宮参候の中津沖津の宮

東郷　田中　春子
勤行の終りし御堂を出づる時うら若き僧の瞳に会えり

名古屋　野崎　伝三
川風に柳の糸のふれあひて蜻蛉のむれの憩ふ術なし

宗像　中村　幸
竹生島より見はるかす湖面鉛色に波静かなりはらめる魔性

武丸　立石　昇
天草の海は藍より青しとふ言葉繰り返し我は船ゆく

福間　木梨よしの
七浦の浜より集う祭船白浪蹴って御座船護る

田久　小方　実
郊外も舗装されたり翔ぶがごと郵便ポストへペタル踏み行く

東郷　藤崎　辰子
冬の水湛ふるダムのうへを来て鴉は杉の秀にとまりたり

名古屋　野崎　博子
窓の月さし照るたたみの上低く馬虻の飛ぶ木曽の山宿

田熊　今村　重刀
わが欲りていたりし眼鏡を吾子たちが敬老の日に贈りくれたり

八幡西　安川　浄生
山門をくぐれば匂ふ菩提樹の花咲くところ花散るところ

田熊　鷲頭かつ代
阿弥寺陀陵鎮みおはすをあなかしこ荒ぶる潮の風まともなる

宮田　北原　君子
夜の客送りて出れば門燈の辺りは小虫の群れわきてをり

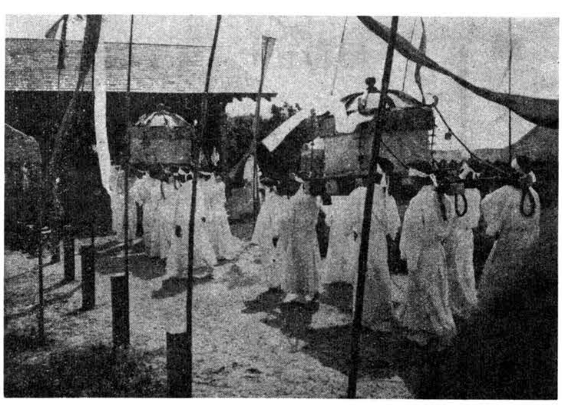
田久　立花　勇雄
寝苦してフェリーの一夜は明けそめて大阪港へ船は入りゆく

田熊　吉田　直志
さ苗より心づくしに育てたる菊の大輪ほころび匂ふ

秋晴れのもと 秋季大祭斎行さる

当大社最大の神事で、七百年の古い伝統をほこる田島放生会は、幸い好天に恵まれ、十月一日、同月二日が土曜日、日曜日と重った為に御社頭は郡内は勿論遠近の二十数万人の参拝者で大いに賑った。

九月三十日午前九時、大祭の始まりに当り、高宮祭、地主祭を斎行。引続き午前十時、辺津宮の神璽は明日の「みあれの神事」を待って、本殿を出御された、一点の雲もない秋空の下、輦台に奉安された神璽は宮司以下神職並に神湊区氏子総代供奉により、神湊の街中を神幸、屯宮に着御された。



夕刻六時、みなと祭が行われ、いつもは物寂しい静かなたたずまいをみせる屯宮も、この日ばかりは、多数の参拝者や、チビッ子等の相撲等で活気を呈した。

十月一日、午前十時三十分、大島港を出発された沖津宮、中津宮の神璽は数百隻の大船団に護られて神湊に着御。辺津宮の神璽と共に三宮の神璽は各々三台の輦台に奉安され、玄海七浦の海の若者等の奉舁の下、宮司以下神職、楯、鉾、太刀等の威儀物を捧持した玄海町青年団員・宗像青年会議所の有志の人等、又、氏子総代、一般参列者等供奉による約百名の長い神幸の行列は荘重な雅楽の調べにのって厳かに神湊の街を巡幸された。更に、街はずれより自動車による神幸が行われ、大社まで約二粁の道程を白バイを案内として、先導車（湊荘・原光保）に続き、神璽を奉安した辺津宮御座車（㈱栗組・柴田昌子）、沖津宮御座車（門司砕石（株）・田中義彦）、中津宮御座車（門司陸運（株）藤川義雄）、神湊旅館組合等奉仕の供奉車約二十台が従い、午前十二時、三宮の神璽は滞りなく辺津宮本殿に入御された。

かくして、秋季大祭の第一日祭が斎行、神前には御饌、酒、海川山野の神饌に合せ、各地の篤信者より奉献された神酒や果物、七浦漁協より魚等、盛沢山のお供物が献供された。郡内神職代表（年毛神社宮司永島俊一）によって奉幣の儀が行われ、葦津宮司の朗々たる国家鎮護・五穀豊穣・大漁満足を祈念する祝詞に続き、地元青年団奉仕の風俗舞、又玄海中学女子生徒による浦安舞が奉納された。

社頭には恒例の栗・柿・ショウガ等名物の季節物に茶碗、おもちゃ等の露店が軒を並べ夕刻より立錐の余地もない程雑踏を極め、当社職員・消防団・宗像署警察官等総出で参拝者の整理に大わらわであった。

二日、午前八時、伝統の流鏑馬が行われ、真新しい直垂姿に古武士の風格を偲ばせる三人の射手に操られた神馬が境内の馬場を疾走、当り矢、外れ矢等一射毎に大歓声が上った。

午前十時、第二日大祭斎行、勝浦区谷口勇氏が代表となり氏子奉幣の儀が行われた。本年は、数百年来伝承されて来た翁舞が喜多流家元の都合により中止となった事は誠に残念であった。この神事は日本国民の攘災と延命を祈念する由緒ある神事であるだけに来年は是非復活させたいと願うものである。

三日、降雨の中、午前十時、第三日祭斎行、引続き清明殿で宗像護国神社大祭が行われ、遺族会々員百名が参拝された。午後二時拝殿で南坊流献茶の儀が催され、滝口社中代表の点前による濃茶がうやうやしく神前に献じられた。

かくして、錦秋を彩る田島放生会も終り、爽かな秋風にのせて宗像の平野は愈々黄金の稔りを見せはじめるのである。

写真、上は屯宮に着御する沖中両宮御神璽　下は流鏑馬神事

神郡宗像の各所に於いて秋祭斎行

宮地嶽神社 —津屋崎—

稔りの秋を迎えた、去る九月二十一日より三日間、宗像大社の境外摂社の由緒をもつ旧県社である「宮地嶽神社」の秋季大祭が、盛大且つ厳粛に斎行された。

尚二十一日には、当大社より献幣使が参向し、午后一時からの御神幸・延々一キロに及ぶ大名行列にも参加した。同行列の祭主に、タレントの野中小百合が参加され、牛馬十五頭・同神社氏子総代・小中学生百余名の行列で、町内を約三時間をかけて練り歩いた。当日はあいにく曇り空で、時々小雨も降ったが、沿道も賑わっていた。尚期間中境内では、露店も建ち、柔道大会等種々の神賑行事もあり賑わった。

織幡神社 —鐘崎—

九月三十日恒例の織幡神社祭が斎行された。

織幡神社は、玄界灘と響灘とを分かつ鐘崎の岬の先端に突出した佐屋形山上に鎮座する当社の旧摂社（元県社）で、その例祭には当社より職員が献幣する慣らわしとなっている。

古くは延喜式名神大社に列せられた、宗像郡内での式内社は、宗像大社と織幡神社との二社だけである。

御縁起によると、神功皇后三韓征伐のときに、御手づから赤白二旒の旗を織らしめ、これを宗像大菩薩の御手長に付けられたので織幡と名付けられたといわれている。

当日夕刻本殿より御神璽が神輿に遷され、境内下広場の御旅所までお下りがなされ、午后七時祭典が執り行なわれた。夕闇がせまるころ織幡神社の氏子である鐘崎部落の人々は、三々伍々御旅所につめかけ、秋の豊作、豊漁、海上安全の敬虔な祈りをささげる玉串奉奠がなされ祭典が終了した。

祭典終了后広場では子供相撲、花火大会などの諸行事がなされ、夜の更けるまで大賑わいであった。

祖霊社祭 —田島—

当大社境内すぐ傍の祖霊社の秋季大祭は九月二十三日、秋晴れの下、関係者約二百名が参列の上盛大に斎行、当大社より幣帛料が奉献された。

この祖霊社は、明治初年の国家神道の確立にともない、宗像大社の社人、氏子の有志の人等が積極的に改宗、従来の先祖祭や葬祭を仏式より、日本神道本来の神道儀式によって行うために創建されたもので、当時としては全国で僅か数社のみの由緒ある社であった。

現在、氏子数約五百戸を数え、春秋の大祭には、遠く宗像の地を離れて福岡市や北九州市に居住している人等も、はるばると参列され、直会の饗餞を戴き、故郷を偲び、祖先の供徳に感謝するのが慣わしとなっている。

外来処置室とナース・ステーション

残筆しがらみ草紙 (10)

玄陽隠士

二者ともに病院の各室に掲げられた表示である。外来処置室は説明するまでもなく何用の部屋か解るが、ナース・ステーションは病院になじみ深い経歴者にも異様の感があろう。両語を診察すると、ゴツゴツの固さは親しみ難く、横文字の仮名書きは看護婦仲間はいざ知らず外来者は頂きかねる。前者流儀の看護婦控室と表示した方が素直で判り易い。

この病院は循環器科を主目とするが、循環の文字は高校生でも読み書き安易とはゆかない。医学の外来翻訳は特に難物の漢字を明治以来使ってきた慣習がある。勿論、学力優秀者が成っている医者だから、いくら特殊な漢字が出ても困らないし、素人の患者に判る必要もない。

器具の名称は難しい漢字が通り相場だが、日本ではもっとうるさいのが植物名である。くちなし、あじさい、かぼちゃ等漢字がすぐには出てこない。地名も間違いなく他郷人に読めぬものが多い。馬出（福岡市）上八（宗像郡）特牛（山口県）等は異様の代表であろう。

この頃の選挙には、読みにくい書きにくい漢字名に変って仮名ポスターが登場し初めた。目の悪い老人の支持などには分方がよいかも知れない。流行してよい。

漢字の本場中国でも略字の流行が目立つ。我が国でも簡略になりつつあるが、昔の人は律義からか略字は用いなかった。特に往復文書は堅苦しいほど忠実に書かれている。ただ有名寺院に残す僧侶の日記等には符号的略字が見られる。自身だけのメモだから。

例えば醍醐を山山、醍醐を酉酉と記しているが、京都の地名に気付かねば理解し難いものもある。略字と云えば、天下取った程の器量人太閤秀吉が、九州名護屋の陣中から大坂城の淀君に届けた手紙はひどい。少年の頃、針売りになって流浪した彼に勉学の暇などなかった。怪しげな仮名交りは、太閤様の水茎の跡と云えば笑い話になる。書いた当人はまじめだったと思われる。

ナース・ステーションなら、秀吉より院長でなければならない。院長は最新の循環器治療の技能を学んだ真面目の科学者に見える。米国帰りである。或る日の診察中「一日に珈琲をどの位飲むか」と訊ねたので、十杯以上と答えたらあきれ顔。米人の珈琲好きでも五六杯、無茶だと叱られた。茶は入らないから無茶に違いないと、後で山の神に冗談を言った。

文明開化の波が日本を洗い出した頃は、何ごともあちら様崇拝で、洋行帰りが鼻を高くし欧米製品が幅をきかせたものである。今は逆現象の事態が少くない。

自動車やテレビが大量米国に買われて、米国の製造工場が悲鳴をあげ、最近の米国のマーケットにはメイド・インジャパンが列び、醤油までが売られている。従って科学技術など学んでくるよりも、教えに出かける傾向が強くなったそうである。まさに経済大国の実力が備わってきた観がある。軍事大国になって欲しくない。

仁術でなくて算術だと、医者も悪口を言われるが、不正申告や脱税にメスを揮う病院経営者ばかりでもあるまい。人件費や施設費の高騰はもとより、薬品器具食事も経費は食う。患者もわがままな連中がふえて手数がかかる。僅かのミスでも素人が邪推したりあげ足を取っては、医は仁術なりとばかりでは生きてゆけない。医者が訴えられ多額の損害賠償を要求されるなど、数十年前の日本列島では思いもよらぬ珍事である。

ナース諸君にしても、白衣の天使を自負するなど昔の夢である。今は天使はどこにも居ない。それどころか労働組合の組織強化で、紅い気焔があがる。戦時中は天使とおだてられて銃砲弾の飛ぶ戦場で、身命を賭してご奉公に挺身した若い女性も少くない。一部は敵弾や悪疫のため異国の丘に斃れた例もある。最も哀れを誘うのは、沖縄戦に散ったひめゆりの塔であった。もう白衣の天使などになってくれるな。

レントゲン撮影から心電図調査と、技術的な診療業務を若い看護婦が次々に手際よく進める。やさしく信頼のおける点、院長の指導適切が思われて気持がよい。或る日、用事があって看護婦控室をのぞいたら、窓側に世界的名優として人気絶頂のアラン・ドロンのブロマイドが懸っていた。

神湊（こうのみなと） (72)

楠早鳥作　福田長庵画

帰去来（その一）

その夜、明継は弥太を相手に酒を酌みかわし京都の政治状勢を語った。

管領斯波義将はとりたてて衆にすぐれた人物ではないが、ただ彼の長所は物事を地味に着実に処理する能力にある。義将はその能力を充分に駆使して管領のもとに幕府の職制をととのえ、鎌倉幕府の模倣にすぎなかった諸制度を将軍管領の体制下に一元的に再編成した。これにより政治をとりしきり将軍義満の地位をこの国最高の権力者にすべく地盤を固めつつあった。

そのとき、この頂点に立つ義満の目はたえず公家社会に注がれ、その生活も、位階の昇進に伴ってますます公家化の様相を深めていった。このことにより義満はためには貴族趣味の満足をうるためとみせかけ、内実は、公武を統一する最高権力者「国王」の道を目指していた。絶海中津はその演出家となった。絶海は演技の振りつけ役を探しつづけた、つまり義満の公家化の橋わたし役となる人物を条件の第一に公家社会の地位が高いこと、次に当代第一流の文化人であること、この二点を基準として選考した結果、二条良基という人物が浮びでた。

良基は公家最高の家の出であり北朝の重臣として名高く、摂政、関白をしばしば歴任していた。また文化人としては連歌の勅撰集として有名な「菟玖波集」の撰者であった。絶海の頼みを引受けた良基は、義満の宮廷内での出処進退はもとより、和歌、連歌、管絃、花合せにいたるまで、およそ当時の公家がたしなんだいっさいの教養を指導した。良基をさして「後愚昧記」は「大樹（将軍）を扶持する人」と評している。

この良基の義満への接近は公家社会に大きな影響をおよぼした。朝廷の公的行事はもちろんのこと私的な詩歌、管絃の席、社寺参詣や四季の行楽にも将軍のまわりには諸大名はもとより、義満夫人業子の兄弟である日野資康、資教をはじめとして、三条西公時、万里小路嗣房、東坊城秀長のほか、つねに多数の公家があたかも将軍の家臣のごとくはべっていた。

ここに義満は、平清盛以来為政者の最大の難事とされていた公武の合体をはたすことができた。また絶海は中世的権威の一方の象徴である社寺についても、信仰の問題をこえて政治的意味あいにおいて対処した。京、鎌倉を中心とした五山、十刹、諸山といった禅宗の官寺制度を確立させ、次第にその宗教活動を低調なものとしたため、僧侶たちは公武に接近する手段として漢詩文にしたしんだ。このように時の政治権力に結びついたのは、なにも禅宗だけではない、鎮護国家を標榜した南都仏教山林修行をめざしながら宗教的加持祈祷を通じて朝廷や貴族にとりいった平安時代の天台、真言宗もみなこの例であった。

かくして義満は、将軍、太政大臣、准三宮を一身にかね、当代一流の武家・公家・僧侶の人脈を背景にしてその地位を揺ぎないものにした。まさにその権力は国王にひってきするものであった。

明継のながい話を聞きおわって弥太は＜ほうっ＞と大きく息をついた。

「なるほど、そうすればここ当分は世の中に変化はありますまい。すると僕らの商いの方ももっと手広くやれる寸法ですな」

結論ずけるように言う弥太に向って、再び明継は口を開いた＜とは言ってもこの体制を維持するにはあまりにも金がかかりすぎる、この幕府財政の不安定さをついて、土倉・酒屋が繁昌しているのは知っての通りだ、内からの身入りが少なければそれを外に求めるのは自然の理だ、みていろ今に幕府は貿易を一人じめにすることを考える。悪いことに海商たちは幕府の統制でひっこむような連中ではない、となれば昔と同じこと海商変じて海賊となる＞

いちいちうなずいて考えこむ弥太の前に呰眼の女人が現れ寝所の支度ができたと告げた。＜ふん＞と返事をして弥太は、あごをしゃくり

「この女をどうします、必要がなければ連れて帰りますが」

と明継に問いかけた。

明継の顔にためらいの表情がうかんだ。

×　×　×　×

秋晴れの瀬戸内路
徳山宗像神社祭盛大に斎行

徳山大浦濱、櫛ケ浜に秋風立つ十月五日、出光興産徳山製油所内に鎮座される、宗像神社の秋季大祭が当社宇都宮祢宜外職員二名、巫女二名にて奉仕された。当日は好天の秋日で、そよ吹く風も巫女のおくれ毛にたわむれる様であった。午前九時半、太鼓にのって流れる奏楽の中を奉仕員は神殿に参進する。目にしみる様な緑の芝生、真白の参道の砂、黒々とその上に影を進める。斎服、浄衣の白がいっそうの荘厳さをかもし出す。神殿前斎場には同製油所、野口紀雄所長以下職員五十余名が静粛に参列。

斎主の祝詞が、巫女による浦安舞の奏上の雅楽が朗々と流れ、玉串拝礼の拍手の音が一段と大きく響いた。祭典を終り事務所の控室に帰って始めて、ここが徳山の出光製油所と云う大工場の中であることを再知する様にしずかな工場内である。引続いて石油化学工場内に鎮まります同神社祭が斎行され、増森萬一工場長以下二十数名の男子職員の参列があった。同神社は製油所内の宗像神社と同じ作りの境内に鎮座されているので一見、見まちがう様な美しい境内である。一行は同工場よりさらにマイクロバスに約二〇分、大浦湾入口にある徳山製油所操油二課（旧大浦油槽所）の大型タンクの群立する小高い丘の上に鎮座される大浦宗像神社祭の奉仕も終り、美しい大浦湾を見下す時、遠くに赤白のエントツと、タンク類が秋の日にキラキラと美しく輝いていた。

宗像大社交通安全コーナー開催
—秋の交通安全旬間に協賛—

秋の全国交通安全旬間（九月二十一日～三十日）に際し、当大社では初めての試みとして、祈願殿ロビーに「交通安全コーナー」を設置、広く参拝者へ交通安全の啓蒙を呼びかけた。

会場には宗像警察署、郡交通安全協会等の協力により、交通安全豆知識を誰でも理解できるよう図解したパネル、交通巡視員の活動写真、様々な事故例の写真＝特に今年の重点目標である「シートベルト着用」の効果を示す写真＝等をはじめ、県や郡内の児童が描いた交通安全ポスター、標語の秀作が広い会場一ぱいに展示された。

又、特別展示として、〃ドライバーには鬼よりコワく、児童にとっては桃太郎より強い「白バイ（七五〇cc）」〃も展示された。この白バイは宗像署に於いて郡内の交通安全に活躍していたが今度、定年退職（耐用年数が過ぎ廃車）を迎え、今回の安全コーナーに展示、最後の奉公として同コーナーの人気者となり啓蒙に一役買った。

又、交通安全コーナーの開催と同時に郡内の幼稚園々児百名を招待し、当大社清明殿に於いて県警より四名の交通巡視員の派遣を得て交通安全教室を行なった。巡視員による交通ルールの実技指導、人形劇、紙芝居による交通マナー等をユーモアを交えてのわかりやすい指導に、園児をはじめ付添の先生、父母の方々に好評を得た。

神湊地区待望の
簡易水道通水式斎行

去る九月一日、神湊地区簡易水道通水式が当社神職奉仕のもと午前十一時より斎行された。

この簡易水道は神湊地区の水不足を解決する為、玄海町が設けたもので、浄水場とその近くの二ケ所計三ケ所の井戸より取り水し、浄水して、配水池に送り、そこより神湊二千五百人の住民に給水されることになっている。

祭典は雲一つない好天気に恵まれて神湊簡易水道浄水場内にて行なわれた。高橋玄海町町長、同町町議、施工の扶桑建設株式会社など関係者約三十名が参列した。

修祓、降神、献饌、祝詞奏上につづき通水の儀が行なわれた。

ついで工事中の神助を謝し奉るとともに水道施設の永続長久を祈願して玉串が奉奠された。

撤饌、昇神と厳粛に斎行された。

なお、簡易水道の最大給水能力は、一日四百トンで現在は一日百五十トンほど給水しているとのことである。

玄海ミカン保存
冷凍庫起工式

去る九月十三日玄海町古田字井ノ手に在る玄海柑橘類協同事業連絡協議会（会長深田稔氏）の「晩生柑橘類消費地ストック・ポイント施設」の起工式が関係者多数の出席のもとに行われた。

この施設は通称「選果場」と呼ばれ、玄海のみかんを選別出荷し低温貯蔵をする施設である。

施設は昭和四十七年に第一期のみかん選果場と事務所の工事に始まって、低温貯蔵庫、荷受ホームと三期に分け、四棟の施設から成っている。

本年度工事として着工された低温貯蔵庫は、宗像及び遠賀郡で生産される八〇〇トンの甘夏柑、三〇〇トンのハッサク更に一〇トンのネーブル等を低温貯蔵するためである。特に甘夏柑の場合、取入れの時期が五～六月が最も良いとされている。しかしこの頃のものは酸味が多く、これを一～二月頃まで低温貯蔵しておくことに依って甘味が増してくる。これまでこの作業を各家庭で行って来たが、低温に保つことも不可能の為、味の良いみかんの出荷がなされなかった。

温州みかんはもちろんのこと、これまでみかんと云えば、静岡とされていたが、今後は雲州をはじめ、甘夏柑、ハッサク、ネーブルに至るまで、福岡みかんとして九州は云うに及ばず関東、関西方面までへも味、質ともに良いみかんの出荷が出来る日も間近い。

みかんの取入れシーズンともなればこの三万平方メートルの選果場も、渡邉歴所長をはじめ約八十名の職員が総出で種々の作業にあたる。郡内唯一の農工場である。

第六回ベスト・ドライビング
ファミリーコンテスト大会

初秋の去る九月十五日、当大社境内にゼッケン番号をつけた、乗用車が続々と到着してきた。これは第六回ベスト・ドライビングファミリーコンテスト（読売新聞西部本社主催・警察庁、全日本交通安全協会等の協賛）に参加した車輌で当大社がゴールに指定されていたのである。

このベスト・ドライビング・ファミリーコンテストは「家族ドライブを楽しみながら運転技術と安全マナーを競う」もので、今回は北九州地区で開催された。当日は福岡県内はもとより九州、山口県内より八〇台の車が参加して、九州工業大学（北九州市戸畑区）を起点に、遠賀、鞍手両郡を経て当大社までの区間に九ケ所のチェックポイントを設け＝到着時間の正確さ・交通マナーの優劣・ペーパーテスト・車検テスト・タイヤ交換テスト等＝減点方法による各種テストを行い、総合・ファミリーの両部門に分け、日頃の運転技術の腕前を競った。途中の落伍車も無く全車無事、ゴールの当大社に到着した。

成績左記の通り（敬称略）

◇総合
優勝 畑中 修二（北九州市小倉北区）
二位 井桁 龍介（北九州市八幡東区）
三位 城戸 新哉（北九州市小倉北区）

◇ファミリー
優勝 林 真理子（北九州市八幡西区）
二位 松富 貞男（下関市彦島）
三位 川村 一美（北九州市小倉南区）

以上

話題の新車をみる (三)
MAX・CUOREの巻

ダイハツ工業よりフェローMAXがデヴューして以来、早くも七年余りの歳月が流れた。その間に軽としては初めてのハードトップとか数々のスポーティ仕様が出現と相成った。

そして、昨年六月軽自動車規格の拡大と共に、MAX五五〇が登場し、エンジンは排気対策の兼合いから、従前の2サイクルから4サイクルへと換装したがボディは従来のまゝのサイズであった。

今回のニューモデルはネーミングも新たに「クオーレ」（イタリア語でこころの意）と称し、フェローMAX五五〇のボディ・シェルをもとに、全幅を一〇〇mm広げたもので、車側のデザインは変わりないが、前・後面のイメージが若干変わった。ボディの拡幅によって、室内幅と前後トレッドはそれぞれ一〇〇mm広がり、フロント・シート幅も二〇mmアップ、左足のフットスペースは一〇三mmから一四六mmに大幅に拡大した。

装備・仕様面では、軽初のマルチュースレバーの採用、温水ヒーターの採用、インパネ左右に移されたベンチレーターなどが特徴で、新たに高級仕様の「EXタイプ」がシリーズアップした。即ちEXは、2ドアに1モデル、4ドアには2ドアあり、床面にカーペットを敷設、肌触りの良いフルニットのシート、フルトリムのドア、間欠ワイパーの採用など、高級指向へも応えている。

エンジンは昨年六月に登場したMAX五五〇と共通の五四七CC、水冷4サイクル・ツイン排気対策はTGPと希薄燃焼方式に触媒をプラスした五一年対策である。

ボディはワイド化されたが、重量を五kg増に抑えており、中・低速トルクが優先されているので特に街中で乗り易い。

また、コッグドベルト駆動エンジンの静粛性も優れた点であり、2軸式バランスシャットも4サイクル・ツイン独得の振動をよく消しているし、またFWDゆえ、直進性がよく、横風にも強い。

ハンドリングは常識的な速度域ではごく軽いアンダーステアに終始する安全なもの。更に4輪独立懸架のため、ロードホールディングに優れている。六〇km/h定地燃費も二八km/ℓと変わりない。

結局、新登場MAXクオーレは、ただ単に車幅を九〇mm拡げたのみならず、細部に至るまで採用のゆきとどいた市街地の足として勿論、高速ドライブにも実用的である。

〈まつりむなかたビックハイク〉
宗像路を歩く

秋分の日、胸と背にゼッケン、軽やかなスタイルで、頑張ろう！の掛声を後に宗像高校を出発〃まつりむなかた・ビックハイク〃の、のぼりを先頭に田熊旧三号線を西へ東郷駅東口を横断、田島の方へ老若男女百八十余名。

心豊かな宗像をつくろうと「むなかたの心は一つ」のメインテーマで企画されたまつり宗像の事業の一環として、美しい自然と古い歴史をかみしめ乍ら二十三・二粁を歩こうと云うのであった。

最高令者七十六才、最年少者五才、宗像大社までの五・七粁黄金色に色づきはじめた稲穂、真赤に燃えるまんじゅしゃげを眺めながら十時五十分宗像大社に到着、一同無事完歩祈念のお祓いを受け、再び勝浦小学校までの四粁、かつての宿場、宿の谷を経て大坂越して正午 勝浦小学校に着き昼食をとる。約四十分の休息、さて今迄感じなかった足の裏が痛む、こっそり靴を脱いでみたがまだ大丈夫、頑張れ！とひとりごと。十二時四十分出発、昔は入り海であったと云う松原を右に「秋の夜の潮干の月のかつら満山までつゞく海の中道」と想いを浮べ乍ら足の動くまま塩浜一千間土手と、数年前までは松の並木に一息入れたものだが、哀れ松喰虫にその影なく今はたゞ無情にも一筋のアスファルト道路が延々と……次の休息地波折宮についた時には汗ビッショリになっていた。約十五分の休息の後十四時十分渡り橋から東郷公園へと二・一粁の急な坂道を息をはずませながら頂上に登れば眼下に玄界灘を一望に日本海海戦の当時を偲びつゝ記念撮影。愈々最後の五・七粁、渡り橋とゴールをめざして自然に足早になり、お祭りで賑う宮地嶽神社の鳥居をくぐる頃は日は西に傾き落日の淡い光が疲れた足をなぐさめている様であった。最後に一人の落伍者もなく頑張り通した一同に対し今後益々の御精進を祈り筆をおく。

宗像郡町村会
事務局
局長 中野金市

昭和五十二年度 宗像会々員名簿

今月号より各地宗像会々員の紹介を致します。

◇八幡宗像会◇

一、事務局 北九州市八幡東区中央町二丁目 株式会社光会館内

一、役員（昭和五十二年一月現在）
会長 真鍋 良金
副会長 安永 義紹
〃 大和 健示
幹事（理事） 伊豆丸 光男
会計（〃） 正野 満二
監査（〃） 今崎 一雄
婦人部（〃） 木原 フジノ
理事 深田 健三
〃 高田 四郎
〃 永島 健彦
〃 立花 彦一郎
〃 蔵野 英男
〃 中野 好光
〃 下北 一夫
顧問 占部 真太郎
名誉会長 岡崎 春雄

一、会員（順不同）
占部真太郎 宗像郡津屋崎町渡一、四七四
深田 健三 八幡西区鉄王一－六－四
安永 義紹 〃 〃 紅梅三丁目紅梅台ハイツ二－七〇二
永島 健彦 〃 東区中尾一－二三－一三
浜田 庫太 宗像郡宗像町赤間城ケ谷団地六四
山本 敏美 〃 〃 三郎丸
大社 重信 八幡東区祝町一－四－五
高田 源平 〃 春の町二－九－一八
豊福 茂 〃 西区下上津役蟷螂九の一三
石原 正人 宗像郡宗像町村山田
八尋 正実 八幡西区泉ケ浦一丁目一三
渡部 国隆 〃 〃 折尾大膳二の三桜ケ丘
今橋 康行 〃 〃鉄王一丁目一〇－三
岡崎 春雄 〃 東区中尾二丁目
松尾 七郎 〃 〃 東山二丁目四－一三
立花彦一郎 〃 〃 二丁目一〇－二三
原田 健吾 〃 〃 荒生田一丁目四－一〇
有田藤三郎 〃 〃 茶屋町一－二〇
白石 計一 〃 〃 滑田二丁目八－二八
山本 雄造 〃 〃 二－一四－三〇
今崎 一雄 八幡東区末広町十一－十八
今崎 計 〃 西区西鳴水二丁目六－一－二三
石松 重隆 〃 幸神三丁目
有田亀次郎 〃 東区羽衣町八－一五
占部 甲二 〃 〃 中央町二丁目一五－一八
占部 四郎 〃 〃 〃 二－一五－二一
伊豆丸光男 〃 〃 山王二丁目一八－二〇
白木 栄吉 〃 〃 中央町三丁目五－二三
伊豆丸 治 〃 西区東鳴水三丁目六－一－九
花田 勝 〃 東区宮田町九－三
石松 清 〃 〃 前田一丁目十一－八
伊豆丸 博 〃 西区筒井一〇

（次号に続く）

宗像大社歌会 俳句作品集（一七）

藤沢　玄洋子
島の神迎えて総社の秋祭り

土穴　八尋　恒夫
南瓜をば日日に食いたる時節あり

名古屋　野崎　傳三
化し野や仏のなかの木守柿
湖づらの松に消えゆく秋の雨

宗像　安部　ゆき
自愛たゞ一途の吾や韮の花

津屋崎　浜津　鴻浪
追憶や独り見つめる蓮の花

福間　広渡一寸毛
秋祭り筆太ふとの幟かな
焼酎の割燗うまし村まつり

田熊　力丸　一郎
虫時雨心に染みる目ざめかな

宗像　岡田　無名
祭典の静けさ破る鵙高音

浜の寄物

最古の寄物と海の幸（四）

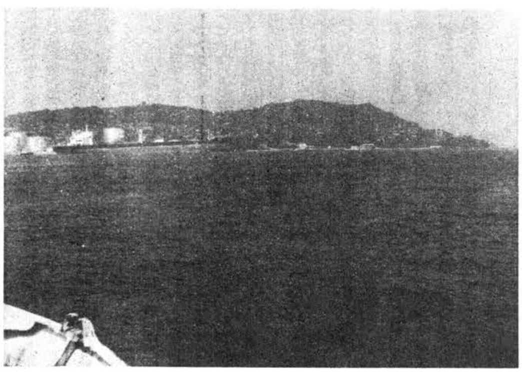
いしいただし

風や海流に乗って寄る海の幸は沿岸住民達の楽しみでもあった。だが離島や辺びな地域では、寄る物を待つだけでなく、積極的に働きかけて、寄らせるということもあったのである。平凡社から出版されている「日本残酷物語」（第一部・貧しき人々のむれ）には、そのような話を幾例も紹介している。本州の北端、下北半島の尻屋崎角の村では正月の年占いには、大きな釜に船を浮かべ釜をたぎらせ、船のひっくりかえる順で、その年の月々の漂着物の多少を判断したという。渥美半島の突端、柳田国男の椰子の実の漂着で名高い伊良湖岬にもこんな話が残っている。「イナサコイヤレデンゴロリン」という言葉があるそうだ。「イナサの風よ来やれ、船をデンゴロリンとくつがえせ」という意である。陶器を積んだ船は荷の重さのため難破の率が高く、難破した船に積んでいた陶器は打ち寄せられ砂浜の中に埋れる。土地の人はこれを砂中から掘り出して伊良湖焼と言っていたそうである。次のになると寄らせるというよりは海賊的な性格が強い。伊豆下田の西、平石浦では、むかし年始に来る者が、まず「イナサ参ろう」と言う。するとその家の主人が「寄せてござれ、古釘で祝いましょう」と答える。イナサというのは海上の悪風で、この風が吹く時は、このあたりの人たちは各自、松火やあるいは背中に戸を負い、火を燃やして浜辺を往来する。沖を航行する船は、この火を見て人家があると思い、接岸しようとして暗礁に乗り上げ破船してしまう。翌朝、浦人は船を出して破船の荷物や道具を奪うという。このようなことは壱岐島にもあり、山口麻太郎氏は「日本の民俗・長崎」で述べている。江戸時代の東遊雑記巻之十九には「中国筋、伊豆の国にては、夜中風の烈しき時には沖行舟に破船をさせて、船荷物を奪ひとらんとて板を背におひてそれへ火を燃して帆のごとく見せ、沖行舟の磯近くよりて岩に乗り上て破船するをよろこび、人の死をかえり見ずして荷物を奪ひとる…」（日本庶民生活史料集成第三巻）とある。宮本常一氏の「屋久島民俗誌」には、ある年に因崎の難破船が宮之浦へ流れ寄った。村人が近寄ってみると船には人がいない。よくさがさせると隠れていたのである。「どうぞ助けてくれ」と手を合わせる。この浦にはそういう者はいないと説明すると喜んだという。助かっても場所や島によっては生きては帰れぬこともあったのである。

だがすべてが今、紹介したようなことばかしではない。「瀬戸内海島嶼巡訪日記（アチック・ミューゼアム編）などにみられるように、海のしけた時に火をたいたり、物をふったりして、沖の船の目じるしとしたり、安全のための誘導等もおこなったりしていることも付記しておかなければならない。

寄り物が多いように遠賀郡芦屋浜や下関市六連島（むつれじま）あたりでは、正月に箸と椀を流して祈っていたという。私は芦屋でも色々な人に会って尋ねたが、もうそんな記憶は残ってはいなかった。九月下関市六連島へ行って、そのことを尋ねまわったが、だれ一人そんなことを知っている人はいなかった。無論八十数才という老人にも、島の住職にも聞いたが「そんな話はしらん」という素気ない返事であった。畑仕事の婦人にも尋ねたが知らない。ついでに知っている寄物はないか尋ねたら、戦争中にミカンを積んだ船が機雷に触れ、浜へ大量に流れ寄ったことはありましたなあー、ただ私が島を歩き回った印象からすれば、瀬戸内の入口（本州の玄関口）に位置し、船舶の航行も多く、海流との関係もあって海難事故等で寄物の多い環境にはあったとみた。

余談になるが、この島の中央部に宗像様という祠があると聞き、その祠まで行ってみた。祠には元治二丑三月吉日と彫られていた。ここからは周囲の見晴しもよく、遠く宗像の山々や大島が見えた。近くにある自衛隊六連島海上警備隊で、天気のよい日は沖ノ島も見えはしないかを尋ねたら、見えるという返事であった。ここが何故、宗像と関係あるのか。沖ノ島が見えるということは、沖ノ島と関係ある時代、沖ノ島の祭祀が営なまれる時期は古墳から奈良時代である。航海安全の信仰となれば海人と関係がどうもありそうだ。



六連島遠影　（山口県下関市）

島には遺跡がないか島の人に聞くと音次郎という砂浜のところで、数年前発掘調査があり土器類がたくさん掘り出されたことがあるという。私はすぐに音次郎の浜へ行ってみた。砂浜にも須恵器や土師の破片を数片採集した。砂浜の先端のところは、丘陵がつき出たようになっており、反対側は侵食をうけて崖のようになっており、礫石が堆積した断面をよく見ると須恵器、土師器に混じて、貝殻や魚の骨、土錘（土製のおもり）等がある。宗像様の祠はこの海人と関係があるのではないか、そんなことを想像してかえった。六連島については何の知識ももたなかったので、島から帰り「下関市史」を読んでみた。六連島の遺跡の報告を記載されていたが、縄文後晩期の遺物が出土しているが、中心はやはり、須恵器や土師器の時代であるようだ。この報告で興味があったのは、発掘で小児の死骸が出たが、これは埋葬された状態ではなく、流れ寄ったような状態であったと記している。漂着死骸の最古の資料かも知れない。

〔年中人事〕

算賀（さんが）

古から四十才・五十才・六十才と以後十年ごとに行われる年寿の祝で、もとは大講の風習から起った。聖武天皇の四十満賀のため、天保十二年（七四〇）十月に、良弁僧正が講を設けたことが「東大寺要録」に見えているのが初めで、その後、平安時代には宮廷や貴族の間で盛んに行われてきた。

近世に至って江戸時代から六十一才の還暦の祝、七十七才の喜寿、八十才の米寿の祝などが主として行われるようになった。平安時代、天皇の算賀は南殿で行われ、諸所からの献物があり、次いで供饌や賜饌があって、庭上で雅楽が奏せられ、人々に禄を賜わって終了するという節会（せちえ）と同形式のものであった。しかしこの算賀の行われる前には、諷誦や賑給が行われ、またその宴の後、公卿・殿上人・侍臣などの管絃の上手を召して酒膳を給い、管絃を奏することなどもあった。

献物の数はその年寿の数に等しくする例が多く、嘉祥二年（八四九）仁明天皇四十賀には、金剛寿命経四十巻その他諸寺・諸家より種々のものが同数献ぜられている。

一般公家の算賀も同じようで、近親の者から調度その他種々の贈物があり、当日は宴を催し、詩歌管絃・舞楽などを催した。四十を不惑（ふわく）といい算賀の初めとするが、これは孔子が四十にして初めて惑わずといって老成の境に達したのにちなんだものである。

これをまた初賀ともいう。以下九十才・百才に及ぶが、九十賀では俊成卿の賀を後鳥羽上皇が二条御所において催されたのが知られている。このように臣下の賀を賜う例は、他にも僧正遍昭七十賀、玄宗法師八十賀などがあった。この時銀製竹形の鳩杖を賜わるが、一般にも算賀に杖を贈ることは例が多い。

六十一の賀はおもに近世行われたもので、本卦がえりともいい、還暦という。生年月の干支が六十一年目で再びもとに還るからで、その年の生誕の日に、俗に赤頭巾をかぶり、赤い着物を着て、嬰児に還ったことを祝う。一に華甲ともいうのは、華字を分析すると六十一になる故といわれる。また七十賀を古稀の祝というのは、杜甫の曲江の詩に「人生七十古来稀」という句があるために起ったものである。

七十七才を喜寿祝と称して祝うことも近世に起ったが、これは喜字の草体からきたことであり、また八十をハト（鳩）として宮中から鳩杖を賜い、八十八を米寿（べいじゅ）またはよねの祝として祝うことなどが近世から行われ始めた。

厄年（やくとし）

「源氏物語」の若菜の一節に、柴上が三十七才の厄年になったので、とりわけ祈祷もし、身を慎しむと見えている。

厄年はもとより陰陽道（おんみょうどう）の説で、この信仰が盛んになった平安時代には、公家の社会で厄年をおそれる風が強かった。また年厄ばかりでなく、月厄・日厄・時厄も同様で、それにあたれば、障りのある造作や行動をやめ、陰陽道や仏教の祈祷をし、神社の修祓をうけ、或は厄を転ずる利益のある寺社に参詣して、その難を免れようとしている。

こうした風習は、やがて武家社会にも広まり、中世の末大友宗麟の軍配者が、今年は四十九才の厄年ゆえ、弓箭のことは慎しむがよいといさめた例があり、このころには民間にも広まっていた。

何歳が厄年にあたるかについては、時代によっていろいろの説があり、地方によってまちまちであるが、室町時代の「拾芥抄」には、十三・二十五・三十七・四十九・六十一・八十五・九十九才を厄年としているのは、中世の標準と思われる。江戸時代の俗説では、男厄が二十五・四十二才、女厄は十九・三十三才といっている。しかし中世の初め、三十三才の男子について、重厄の年と記した例があり、男厄・女厄の分れたのは、中世以後のことである。これらの厄年の中から、近世の末ごろには男子の四十二才、女子の三十三才が大厄の年として特に選ばれている。

室町時代の末、京都では役おとし（厄落）といって、年の数だけ銭をつつみ、夜歩いている乞食に投げ与える風習があったが、江戸時代には厄払ともいって、十二月晦日に綿巾で覆面した乞食が、「疫払、疫落」と呼ばわりながら、除夜まで往来を歩いた。近時まで病気にかかった者が、銭を辻に落す風習が残っていたのも、厄年に櫛や銭など身につけたものを落すことから転じたものであろう。

また厄年の年頭には年祝いを行い、年の内に正月を二回迎え、茅の輪をくぐり、御嶽参りに出かけたりする習慣も、江戸以後のことと思われる。

◇十一月祭典・行事案内◇

※辺津宮

十一月一・十五日　月次祭　午前十一時
十一月三日　明治祭　午前十一時
十一月十二日　遷宮記念祭　午前十一時
十一月十三日　新嘗祭　午前十一時
十一月十五日　七五三祭
（十一日〜二十日迄斎行）

※秋季保存会奉納行事

十一月一日〜二十日　西日本菊花大会
十一月三日　奉納剣道大会
十一月吉日　奉納柔道大会
十一月三日　奉納吟詠大会
十一月六日　宗像大社本因坊戦
十一月十一日　宗像大社献詠短歌大会
十一月十一日〜十五日　奉納盆栽展
十一月十三日　宗像大社かるた大会

※中津宮

十月二十六・二十七日　沖中両宮秋季大祭
十一月一・十五日　月次祭　午前十一時
十一月十五日　七五三祭

◇九月　社務日誌◇

九月一日
月次祭　午前十時
風鎮祭　午前十時三〇分
臼杵運送（株）宗像神社月次祭
神湊簡易水道通水式
許斐出光興産福岡支店長外参拝
木村博典福岡法務局長参拝

九月四日
第二次欧州宗教事情視察団々長額賀日光東照宮々司外十二名参拝
堤出光興産（株）門司支店次長参拝

九月五日
宝物館特別展準備委員会開催

九月六日
秋季大祭打合せ会開催　於斎館

九月八日
田島地区神社総代山林下草刈作業奉仕

九月九日
氏子総代会総会開催　於清明殿

九月十日
在自金比羅神社秋祭奉幣

九月十一日
かるた指導者講習会　於斎館

九月十二日
沖津宮御神璽迎
御座船「協栄丸」（大島）

九月十三日
玄海町成人学級（菊）於斎館

九月十四日
玄海町成人学級（短歌）於斎館

九月十五日
月次祭　午前十時
ベスト・ドライブコンテスト
於第二駐車場

九月十六日
秋季大祭警備打合会　於会議室

九月十七日
田川小学校生徒二百名参拝

九月十八日
越正毅東大助教授・宮永誠美交通評論家・原田県警交通部長・三善RKB毎日放送記者外参拝

九月十九日
正金相互銀行自由ケ丘支店落成式
葦津宮司・楠本祢宜交通安全ゼミナール出席　於福岡市

九月二十日
友原通雄氏琵琶奉納
秋季大祭奉納浦安舞温習開始

九月二十一日
宮地嶽神社秋祭奉幣使出向
県警交通安全祈願祭　六十名
県警巡視員による幼稚園児の交通指導　於祈願殿前駐車場
交通安全コーナー開設於祈願殿

九月二十三日
ひろよ宗像会二〇名参拝

九月二十五日
宗像ビックハイク一〇〇名参拝
宗像大社菊花会役員会　於斎館

九月二十七日
長門一ノ宮住吉神社正遷座祭参列

九月二十八日
田島地区神社総代秋祭準備奉仕

新刊紹介

本誌に毎号健筆をふるわれている石井忠氏の著書「漂着物の博物誌」がこのほど西日本新聞社から発行された。

内容は、「海へ」「海の幸」「漂着物」「いま玄海は」の四章からなり、著者の十年余にわたる漂着物採集の成果が、海への愛情となって結実し香り高いロマンの世界を読者の前に展開する。その反面〝白砂青松はどこへ〟〝ふるさとの海は死んだのか〟とリヤルに海をみつめて社会に警鐘を打ち鳴らし続けている。ぜひ一読をおすすめしたい好著である。

この序文に谷川健一氏は「柳田国男が生きていたら本書の刊行をもっともよろこんだ一人だと確信する」と述べているが、また歴代宗像大宮司も本書の刊行をもっともよろこんだ人々であろう。何故なら著者の調査の対象となった場所は、東は葦屋浦、西は新宮浜に至る海岸線で、この間の漂着物は凡て当社に帰属するところであったから。（寛喜三年宗像文書）

石井忠　著
「漂着物の博物誌」
西日本新聞社発行
二五四頁
一五〇〇円